

小さな黄色のサンシュウユの花が咲き、沈丁花が香り始め、コブシの蕾も今にも咲きそうに膨らんできましたね。

冬枯れの木々の中で艶やかな深緑の椿や山茶花がひときわ目立っています。真っ赤と真っ白の山茶花の花が咲き競っていたのを挿絵にしました。

梅春シーズン。厚いコートの下に着ていたUTOのカシミアのセーターはこれからがアウターとして活躍するシーズンです。

UTOには明るい春色のカシミアとスーピマ綿が勢揃いしています。

四月から新素材のシルクとリネンが加わります。

スーピマ綿共々、ご希望のサイズでお作りする予定です。

ご期待ください。

二〇〇三、秋冬スタート。この秋のカシミアを『自分のサイズで作りたい』というご注文を載せています。これはUTOのカシミアが、なんシーズンにも渡って長く愛着して貰えることの証だと喜んでいきます。

【六月末までに、ご注文の方にプレゼント】

この秋のカシミアをUTOで注文しませんか？

六月末までに三万円以上のセーターをご注文にUTO特製のお洒落でとても温かく便利な『カシミアネック・ウオーマー』をプレゼント致します。



【最高級綿・スーピマ綿】

春夏はなんと言っても綿ですね。素材にとことんこだわるUTO。秋冬のカシミアに匹敵する綿素材を求めて、世界中の優れた綿の中から最も相応しい綿を探しました。

柔らかな上にこしがあり、発色性に優れた超長繊維の最高級綿がテーマです。

最後まで迷ったのがエジプト綿のギザシリーズと海島綿、アメリカ産のスーピマ綿でした。それぞれ優れた特色を持っていますが、発色性とり

しなやかに・綿カシミア シリーズ

半袖丸首	¥18,000.-
Vカーデ	¥26,000.-
長袖ハイネック	¥23,000.-
タートルネック	¥16,000.-



カシミアの柔らかさと綿の丈夫さの良いと取りの綿カシミアです。素材手配の都合で在庫希少です。お早めにご用命ください。(現物限り)

勢揃い・鮮やかカラーのリフニット

半袖ハイネック	¥16,000.-
タンクトップ	¥15,000.-
半袖ハイネック配色	¥18,000.-



伸び縮みが特徴のニットですが、中でもリフ編ニットは抜群の収縮で着心地は格段です。スーピマ綿ならではの発色のよさとしなやかさを実感してください。

ブラウスとのコーディネートで 自分だけの配色セーターを

深V長袖	¥21,000.-
------	-----------



大きくVに開いた柔らかなスーピマ綿セーターに春色のブラウスでスポーティなコーディネートを楽しんでください。V衿に貴方だけの配色を如何ですか？



山茶花

【南青山界限】

超高級食料品店

紀ノ国屋・KINOKUNIYA

青山通りと骨董通りのぶつかる丁字路の角に紀ノ国屋インターナショナルという食料品のスーパーマーケットがあります。スーパーと言ってもダイエーやヨーカドーなどとは違い、超高級な店です。

地下鉄の駅は今では表参道と呼び名が変わってしまいましたが、以前神宮前と言った頃の交差点は今ほど注目されてなく、ここの辺を説明するにはこの紀ノ国屋を起点にしています。

店内には、世界中から珍しい食品が集められています。

並んでいる商品には原産国が小さな国旗で表示され、とても分かりやすくオシャレです。スパイス、ワイン、チーズなどの乳製品、オリブ漬けやピクルスの缶詰、パスタ等々。名前も聞いたことのないような食品も多く、世界にはこんなに色々な食べ物があるのかと感心してしまいます。

創業は明治四十三年だそうです。KINOKUNIYAという呼び方は同じですが、も

ちろん新宿にある本屋の

『紀伊国屋』とは関係ありません。

高級な輸入食料品を扱う店として有名な店で、昭和二十八年には日本で最初にセルフ式を始めたスーパーだそうです。

当時はお客様とは対面販売が当たり前で、『お客様が籠を持って自分で欲しいものを取ってレジに持ってくるなんて、なんて失礼な店だ』というクレームもあったようです。

五十年前の日本は国全体が貧しく、外貨もなく持ち出しが厳しく制限され、しかもドル三六〇円の時代に外国から食料品を輸入販売すること自体が大変難しく特異なビジネスだったんじゃないかと思えます。

当時青山界限に滞在する外国人の多くは、在外公官や外資系の上級職の人たちとその家族。

本国から遠く離れた異郷の日本でたまに口に出来る故郷の味は何ものにも変えがたくお金の問題ではなかったでしょう。

その人たちにあって紀ノ国屋は懐かしい故郷の味と出会える貴重な店だったと思います。

そんなエグゼクティブ御用達のお店だけあって

雰囲気もバツグンで、サービスも至れり尽せり。買った商品はキチンと袋に入れてくれますし、荷物が多いと駐車場まで運んでくれるし、なにせ駐車する時からオーライオーライと親切に誘導してくれます。

なんです、なにせ値段も高いんです。こんな店で毎日買い物してたら我が家の家計は破産です。

今は輸入食品といっても日本中に溢れ、珍しい物でもインターネットで簡単に取り寄せることが出来、全然特別なものとは意識しませんね。

五十年前とは全く違う状況で、紀ノ国屋は他店との差別化が難しくなっているでしょう。そんな状況の中で今後どんな戦略を持っているのかそれとも『昔は・・・』で衰退してしまふのか？



ニットの話 (七)

お客様のご希望のサイズで作ります

1千円〜千五百円の割増料金と約三週間は
スゴイと自負してゐるんですが――

今のところ、カシミアに強いニットメーカーというよりもっと評価して戴いているのが、『三週間ぐらいで、格安で貴方の希望のサイズで作ります』というテーラーメイド的なもの作りじゃないでしょうか？

ニットはお直しは出来ないのが常識ですね。

ニットはループ状になった糸の連なりで出来ているので一箇所でも切るとそこからほどけてしまします。それでも無理やり小さくお直しする事は出来ないことはあります。

カットした所がほどけてしまうのでそこにロックミシンを掛けてしまふんです。

もちろん伸び縮みも着心地も悪くなってしまうんです。そんなセーターを見ると悲しくなります。

もちろん幅を出すことはニットを縫ぎ足さなければならぬのでほぼ不可能です。だから多くの人が少々大きめのセーターや小さ目のセーターも、『ニットは伸び縮みがするから』と我慢して着ていますね。

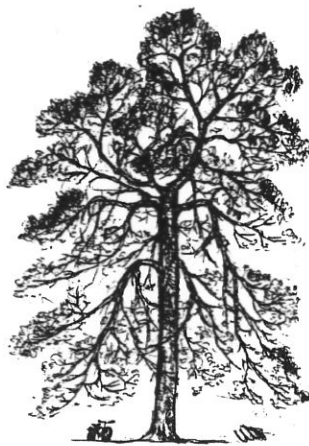
織物の生地で作られた既製服で全くお直しの出来ない方が少なく、殆どの人は袖丈を詰めるとか、バストを出すとか、何処かしらお直しをしているんじゃないでしょうか。

例えば、布帛の服の場合。袖丈一、二センチでもお直しすると思えばセーターの場合は特性の伸び縮みで大体カバー出来ると思います。でもさすがセーターでも四、五センチになると着心地も見栄えもかなり違ってくるんですね。

このセーターに入っていると言いがながら、袖を一折して着ている人は結構多いんじゃないでしょうか。

ニットだからお直しできないと諦めている人に何とか『ピッタリ』のセーターを着てもらいたいと長年模索して、やっと適うようになりました。

お直しを出来ないセーターをピッタリに着る方法は



はり一枚一枚作るしかないんです。
『どうせUTOは全て一枚一枚手作りで作っているんだから』と何とか工場さんに了解してもらい、協力していただくことが出来ました。

バストから裾までストレートの着丈を長くするには編み回数を足してやれば良いんですが、UTOのインナータイプはウエストまで緩やかに絞ってあります。またそこから裾まで少し広がついていて、その為にただ着丈を伸ばすだけといつても、ウエストから裾までの傾斜が違ってくるので目減らしを変えなければなりません。

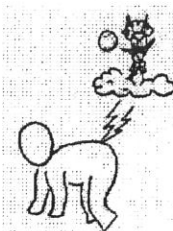
最も単純と思われる着丈でもこれだけの作業をやるので、バストの幅変更する時はそれに伴う肩幅や袖幅、アームホール、袖丈まで影響します。毎回の指示書とこの格闘です。何回も試作して、本番で何百枚何千枚を作るのに対して、UTOの場合は一発勝負で何枚も作るのと同様以上の完成品を作り上げるんですから真剣勝負です。

サイズ以外でもネックの開きを広げたり、タートルの衿を伸ばしたり、裾や袖のリブを長くしたり。一部に配色を入れたりすることでデザインを変え、自分のオリジナルを作る依頼も気軽にお受けしています。上がったセーターを着て戴き、『自然で違和感がないよ』という答えは、実は一番の誉め言葉だと思っています。

こんな手間のかかることを、千円〜千五百円の割増料金でしかも三週間前後という短期間で作ってもらっています。多分服のお直しでもこれぐらいの料金と時間がかかるんじゃないでしょうか？これって凄いことだと自負しているんですが。

忙中暇話・ニット屋のたわごと

ぎっくり腰 再発



二〇〇三年の正月は穏やかに明けました。
カミさんが国立で二十五年もやっている陶器屋『旅人木』は、いつもの通り大晦日の三十一日までやっていたので元旦は毎年恒例の掃除洗濯でバタバタと落ち着かず、二日になつてやっとノんびりの正月らしさが来ました。

その静かな二日の朝。食事中に腰に強烈な痛みが走りまわした。何をしたということもないんです。強いて言えばちょっと横を向いただけです。雷に打たれたみたいでした。立ちあがることも出来ない、そのまま椅子からずり落ちたに伏します。息も出来ない痛さです。

一昨年の年末の仕事納めの日にぎっくり腰をやったばかりなのに、抱えていた爆弾が破裂してしまいました。あの時は何とか電車を乗り継いで家まで帰って着くことが出来ましたが、今回は時間がたつても全く動かせません。三十分以上上床にうつ伏したままです。このまじやどうしようもないので意を決して、ウオウーと、痛みに悲鳴を上げながら匍匐前進でなんとかベッドまで。以後一週間、寝返りもままならない、ベッドに張り付いた板付け蒲団の正月になってしまいました。

この痛みでは救急車しかないとなると、『救急車が正月早ササイレン鳴らして来たらみっともないなあ』など見栄張りの考えが浮かびます。それでもあまりにも痛さに覚悟した矢先、幸い正月にもかかわらずカミさんの友人の医師に電話が通じ、急ぎ痛み止めを買いに走ります。

とにかく安静。四日は、何とか這うことは出来るようにはなりましたが、咳をしても痛いし、くしゃみはもつての外。五日になるとカミさんの肩を借りて何とか移動が可能になりましたが、寝返りをうつたびに、アタタ。でも当初のウオウー！ではありません。日ものです。

このぎっくり腰、本人はとっても辛いんですが経験のない人にとっては今一悲壮感がないんですね。だいたい名前が『ぎっくり腰』。そのうえ重いものを持ち上げたというより鉛筆を拾った拍子のように、笑ってしまうような原因が多く同情をかうようなものじゃないんです。

当初は心配していたカミさんも快方に向かってくると、言葉遣いも扱いもだんだん手荒になつてきます。
『普通は会社や学校が始まるとう具合が悪くなる人が多いのに、休みになると風邪引いたり怪我する。貧乏性なえ』と、カミさんが呆れていますが、休みになると気が抜けるのだから？これって貧乏性ですかねえ？
二月、今度は首筋をやっちゃった。今年はいつてねえ。

世界のホテルを旅する (七)

元旅行屋のお勧め ウィーン・オーストリア

インペリアル・ホテル

ウィーンという街はシュベルトやベートーベンなどの音楽家への思いが強いせいか、街を歩いて教会の鐘の音が聞こえて来ると、その鐘の音までも荘厳な交響曲の一部のように聞こえてしまうのは私だけでしょうか。

インペリアル・ホテルはウィーンのホテルの中では別格の扱いです。というのも、オーストリアには迎賓館はなくこのインペリアル・ホテルが迎賓館も兼ね、超VIPの方々が滞在するものインペリアルホテルなんです。

ウィーン・フィルハーモニーの本拠地のミュージックフェラインはすぐ裏という抜群のロケーションです。

宮殿風の素敵な外観ですが、周りを圧倒するような建物ではありません。入り口は思ったより小じんまりしていますが、これがインペリアルホテルかと言うような感じが、一歩中に入ると思わず感嘆の声が上がつてしまうほどの素晴らしい内装で、入場料金を払って見学する超一級の美術館の中に居るような感じがします。

普段ならガラス越しにしか見られない芸術の中で時間を過ごしながら、ウィーンの歴史を直に感じる貴重な体験が出来ることとは、一流のクラシックホテルに泊まることの一番の醍醐味でしょう。



二度目に泊まった時、前回と同じように一階から二階に続く列柱の見事な階段とホテルの内装を堪能しながらおぼろさんよろしく見学していると、その日は二階のフロアにホテルマンと敵つてガードマンが立っているんです。もちろんホテルマンは今日泊まっている私の顔を知っていますが、緊張した面持ちで『恐縮ですが、今日はエレベーターを使ってください』と言います。『どうして？』と聞くと、『本日はエジプトのサタト大統領が泊りですので、警備上のフロアは立ち入り禁止になっているんです』と言います。

期せずして、エジプトの大統領と泊まり合わせになってしまったんです。そう言われてみれば、玄関に旗が掲げられていたようにです。もう一人の敵つたガードマンはアラブ系の顔をしています。

今は亡きサタト大統領ですが、こんな風に国家元首が普通に一般人と一緒に泊まり合わせるの、このホテルではあんまり特別なことではなさそうなんです。
もちろん、『あんなの泊まるホテルじゃないよ』とは重々自覚はしてゐるんですが、庶民が本物に直に触れる最良の機会、まさに『ホテルを旅する』です。 うと